
最強ブリーフ伝説

ジャッカル東西田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強ブリーフ伝説

【Nコード】

N5423Z

【作者名】

ジャッカル東西田

【あらすじ】

白ブリーフをこよなく愛する男

「神沼 隼人」

高校生にして最強の名を欲しいままにしている彼を打倒する為に様々な謎の組織が動き出す

テロリスト参上！

今日は高校に入って初めての健康診断だ
生まれてこのかたブリーフ派だった俺は当然フィット感重視の白ブリーフを履いて列に並んでいた

「ふむ…… どのいつもこいつもトランクスかボクサーばかりだ。真の王者は白ヴリ以外は履かぬというのに」
俺の入った1 - 5は男子十八人。女子十三人。私立高校だからか身の周りには気を使っているような垢抜けた連中が多い

それ故に、彼らは白ヴリを小学生の履く物[〃] 恥ずかしい物と認識しているらしい
さつきからヒソヒソと俺の背後からクラスメートのものらしき嘲笑^{わらい}が聞こえてくるのはその為だろう

だが！俺は彼らのその自意識こそをあざ笑いたい
俺から観れば、彼らのトランクスやボクサーこそが恥ずべきもの
幼稚園児が履く戦隊物パンツにンコを付けたに等しい愚かさを持っているのだ

故に、俺は媚びない。引かない。省^{かえり}みない

だがその俺の勇姿を疎ましく思っているであろう人間
野球部員ー相楽修吾ーが俺に声を掛けてきた

「神沼くん、なにそのパンツ？　ちょーカッケー〜じゃーん？」
後ろにいる野球部員とクスクスと嘲笑いながら俺のブリーフを指差している

「ああ、これは雁屋崎^{かりやざき}で造られた一級品だ。匠^{たくみ}が凍れる手^{しば}で和紙を漉^すくように一枚一枚丹念に鍛えあげた逸品だな」

「ツツ！？」

俺の言葉に相楽の顔色が変わる
相楽は俺の真意を問う様にこちらを睨み付けた
俺もまたなんとはなしに相楽の方を見た

そして数秒のち

「……おい、行くぞ」

後ろの取り巻きABCに声を掛け去っていった

「何だっただんだ一体？」

よくわからないが相楽はよく俺に絡んでくる
何か俺が気にいらないうちでもしたのだろうか？
今度事情を訊いてみた方がいいかもしれない

「いやあ〜大変だったねえー」

肩をポンと叩いたのは同じクラスの新山だった

「見てたんなら助ける」

腹を殴るふりをしてふざけ合う

こいつは俺の数少ない友達である

気のいい奴だが、相当に頭がキレるので中学時代は裏番として暗躍していたらしい

「いやあ〜無理無理。相楽あいつ野球部期待のルーキーだよ？ 檀^{たん}

高^{こう}で一年からエース張れるのあいつが初めてじゃないかって言われ
てんだから」

檀高^{たんこう}は黒檀^{こくたん}高校の略である。スポーツが強く

野球、陸上、水泳、空手部などが何度か全国優勝している

「へえ凄^{すご}いんだな。あ、そういえば俺さあいつに何か」
そこまで言った時

「ザッシャアー！」

図書室の窓が割られ硝子が飛び散った

見る間に顔の前で腕をクロスさせた全身に迷彩服を纏った男達が同じ様にガラスを突き破って室内に入ってくる

おいおい一体なんなんだ

なんかの撮影かよ？

と言った声が周りから上がる

身体測定を手伝っていた教師も最初ポカンとしていたが、やがて異変に気付いたのか

「ちよつとあなた達！今は身体測定中なんですよ？誰に断って入ってきてるんですか？」

と若干支離滅裂なことを言った

迷彩男の一人が山本（教師）に

「まあ、ちよつと待って下さい。今説明しますから……」
と言って手を開いて近づいていき、腹に思い切りアッパーを食らわせた

「ぐッ……」

腹を抑え、海老反りになった所を更にエルボーで地面に沈める

「おい、宮崎！生徒を拘束して動けないようにしておけ？あとここにいる奴らは１ー５から１ー７だ。名簿があるから顔と名前を確認しておけ？」

山本を殴り倒した迷彩服が仲間という

未だに何が起こったのか、どうしたらいいのかわからないといった表情で互いに顔を見合わせるクラスメート達
そんななか

「おいおいキミ達いゝ。いい加減にしてくれないかな？いくら学校が用意してくれたアトラクションとはいえ僕も忙しいんだよ。この後も野球部の練習があるんだからさ」
そう言っただけで近づいていったのは相楽だった

「相楽よセツ！」

俺は叫んだ

だが相楽はああん？というような顔で一度こちらを振り返ると

「大丈夫大丈夫」

といって前よりも余裕を見せ付けた舐めた態度で迷彩服たちに近づいていった

「な？大丈夫だろ」

相楽がそいつでもう一度振り返った瞬間

迷彩服の一人がトンファーを取り出し、その柄で相楽の後頭部を強く打った

「馬鹿が……」

山本を昏倒させたリーダー格の迷彩服が吐き捨てる

「では諸君。痛い目に遭いたくなければ暫らく大人しくしていてもう生徒たちの全員が気付いていた

――こいつらテロリストだ？――と

テロリスト参上！（後書き）

「テロリストだ？」じゃネエよ！
続きます

図書室の喧騒

「親分おやびん一人足りません！」

生徒を並ばせ人数を確認していた迷彩服がリーダー格に報告する

「欠席している奴じゃないのか？」

葉巻に火を点け、脚をテーブルの上で組んだリーダーが尋ねた

「いいえ、同じクラスの奴に訊いたところ先ほどまでこの部屋にいたそうッす」

「チッ！面倒だな……そいつの名前は？」
不機嫌そうに煙を吐き出す

「1ー5。新山 透ひびろです」
リストを迷彩服がリーダーに渡す

「おい？この新山とかという奴と直前まで一緒にいた奴はどいつだ？」

リーダー格は威嚇するように怒鳴り散らす
自然俺へと視線は集まった

「はン！てめえか？おい新山はどこ行つた？」
トイレ行きましたは通用しねえゾ。そう付け加えて部下たちと下品な笑い声をあげる

「……ざまだな」

俺は静かに腹から声を出した

「あん？声が小さ過ぎてきこねーよ。ブリーフの僕ちゃん？」

リーダー格は聞こえてない事をアピールするように耳に手を当てる
その様にまたテロリストどもの笑い声があがる

が

「BU・ZA・MA（無様）と言った」

瞬間俺から放出された圧倒的なオーラにテロリストは笑うのを止めた

しかし目の前のリーダー格だけは別のようだった

「てめえ？」

というなり殴りかかってくる

俺はそれをギリギリでスウェイして躲し

代わりに態勢を崩した相手の顎先を軽く押してやる

それだけでリーダー格は図書室の端まで転がっていきやがて壁に背中を叩きつけられて止まった

「静かにしてる。なるたけ被害を出したくない」

俺は奴を見下ろしてそう告げ壁時計で時間を確認した

「あと二十分つてところか……」
そう呟いた時

ザッとテロリストたちが俺を取り囲んだ

「てめエ！テメエだけは許さねえ？血祭りにしてやる」

口もとの血を拭い獣のような殺気をだしてリーダー格は立ち上がる

「やれやれ元気なテロリストだ。だがもう直ぐここに連絡を請けた警察がやってくる。罪状を増やしたくなくば大人しくしているんだな」

「はっ！嘘をつけ？この部屋は電波を遮断している。それに警察に連絡されるようなヘマは犯さねえ」

「やれやれ……なあ、どうしてアンタは今ただの一学生である俺なんかに構っているんだ？俺が行方不明の新山の友人だったからじゃあないのか？」

俺は唇を吊り上げ諭すように教える

「ッっ？貴様まさか？」

テロリストたちが一斉に色をなくす

「そのまさか……さ。相楽が注目を集めていた間に、新山を脱出させ警察に連絡させたのはこの俺だ」

あの時かッ！

とリーダー格は唇を噛む

確かその生徒に大声で呼び掛け室内にいる全員の視線を一瞬でも『場』に集めたのは目の前にいるこの男の筈だった

「奴を、奴を殺せえー？」

正気を失ったテロリストたちが俺に向かい駆け出す
だが、俺はそれよりも速く自身の頭を『∞（無限）』の字に振り始めていた

まるで障害物を避けるように蛇行しながら

鎖鎌

トンファー

ボーイナイフ

華麗に迫り来るテロリスト達の攻撃を避けてゆく

「デンプシー……デンプシー？ロールだっ！」

格闘技好きな生徒のひとりが叫んだ

独特なリズムを刻みながら目も止まらぬ速さで左右へと動く振り子
その運動を止められる者は存在しない
ひとりまたひとりと俺が繰り出したブローに沈んでいく

振り子が運動を自ら停止した時

もはや立っているものは誰ひとりいなかった

「ききき…貴様こそ……我が総帥が…捜し……蒼き……狼」
そこまで言ってリーダー格は気絶した

俺はそんな奴のポケットから葉巻とマッチを取り出し口に咥えゆつくりと火をつける

「ハヴァナか……なかなかいい味だ」
白ブリーフ姿のまま優雅にテーブルに腰掛け煙を吐き出す

外からはようやくパトカーのサイレンが響いてきていた

図書室の喧騒（後書き）

「ハヴァナか……」じゃネエよ

まだ続きます

巨乳ポニテ参陣！

「うーん？どうしてテロリストたちは健康診断中の高校生なんか襲ったのかな？」

昼休み

俺は新山と一緒に屋上で昼メシを食べていた

「さあな。悪の組織の考えることなんてわかんねえよ。ショッカーが幼稚園のスクールバスをハイジャックするようなもんじゃあないか？」

自作の鰹節弁当を頬張りながら俺は見解を述べた

「でも惜しいことしたよね。NEWSになってたら隼人は今頃英雄になってたよ！僕も警察に連絡したからちょっとはお零れに与れそうだったのに……」

新山は少し残念そうに笑った

昨日の事件は、箝口令が敷かれたので公になることはなかった
警察が背後にいる組織を燻り出す為に情報公開することを躊躇したのだ

「構わないさ。高校生なんだから金銭が受け取れる訳でなし、学校がサボれる訳でなし。

マスコミにネタにされて鬱陶しいだけだ」

卵焼きを刺した箸を上下に振りながら俺も笑う

「ガタン！」

突如、屋上の扉が凄まじい音を立てて吹っ飛んでいくのが視界に入
った

その後に、俺の目の前にひとりの少女が躍り出た

茶髪ポニーテールのかなり美人な女の子だ

それだけでなく、制服から溢れんばかりに胸が自己主張している

「あんたね。テロリストをひとりで倒したって男は？」

茶髪の少女は腕を組んだままで、俺をジロジロと眺める

「いや俺じゃない。隣りでカレーパン食ってる奴だ」

俺は新山を箸で指してランチに戻る

隣りから「ええッ！」という抗議の声が聞こえてくるが、軽く無視
する

「そう……意外ね。てっきりそっちとおもってたのに。まあいいわ、
あんたあたしと勝負しなさい」

新山の顔を指差して、真剣な表情で見詰める巨乳少女

新山の方はというと

「えっと、あの……だから僕じゃなくてね？ほら僕は警察に通報しただけだからだ」

と俺に遠慮しているのか言葉を濁している

「往生際が悪いわね、ネタはあがつてんのよ！」

と得意満面で胸を張る

当然、おっぱいを揺れる
うーむ。いいおっぱいだ

「いやだから……僕は」

新山が気弱しげに語ろうとするが

「いいからあたしと勝負しなさい！今日の午後5時に学校の裏山で待ってるわ」

と好き勝手に言い残して、後姿にポニテを揺らして戻っていった

「大変だな新山」

俺はウインナーを食べつつも友人の不幸に同情する

「もう！僕は行かないからね！」

ぶんぶん怒りながら新山はこちらを非難するように睨む

「ああ行かなくてもいいだろう。暫らく逃げてればそのうち興味を失うさ。しかし……」

俺は顎に手を置いてわざとらしく考え込む仕草を見せる

「どうしたの？」

「いやあれだけの巨乳だ。おっぱい勝ったら好き放題揉ましてくれるかもしれないぞ？と思ってな」

「……最低だ」

そう告げて、新山は弁当を片付けると俺を置いて先に教室へ戻ってしまった

「ふむ……」

そんな友人を見送って俺は後ろへゴロンと寝そべった

空はあまりに青く美しかった

「いつまでもこんな日々が続くといい」

そう思わずにはいられない蒼さであった

ブリーフが輝く限り

「ちょっと神沼っ？」

「ずかずかと俺を目指して歩み寄ってくるのは昨日の茶髪ポニーテール少女だった」

「一時間目が移動教室な為」

「丁度これから化学の教科書を持って向かおうと思っていたところだった」

「おお？茶ポニさんじゃん、昨日あいつ約束の場所に行かなかったらしいね。俺からもよく言っとくよ。じゃっ？」

「俺は出来るだけ足早に去ろうとするが、後ろから肩を掴まれた」

「あ・ん・たねえ〜！よくも、よくも、あたしを騙してくれたわねッ！全部新山から聞いたわよ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5423z/>

最強ブリーフ伝説

2011年12月19日22時59分発行